

帰化していく外来樹たち

生駒 さや*

外来樹を植える研究

「アフリカで外来樹を植える研究」と聞いた時、どのような印象をもつだろうか。森林減少が問題となっているアフリカにおいて、植林は非常に重要な研究テーマだと支持する人もいれば、外来樹の植林は現地の生態系に悪影響を与える危険性があると批判する人もいるかもしれない。確かに外来種は、競争、交雑、病害、あるいは生態系の基盤を改変させることなどによって、侵入先での在来種の絶滅の危険性を増大させる場合があり、生物多様性に最も深刻な影響を与える要因であるともいわれている [国土交通省 2013]。私自



写真1 林だった場所が全てトウモロコシ畑になっている
(調査村の高台で筆者撮影)

身も、学部生時代から生態学や環境学を学び、外来植物は悪い植物と長いあいだ教わってきたため、調査地に行く前は外来樹を植えるという行為を肯定的に受け入れることは難しかった。

私の調査地はタンザニア南西部、半乾燥地域にある農村だ。私が調査地に到着した8月半ば、村の高台に登ると、収穫が終わったトウモロコシ畑がどこまでも続いているのが見えた。一緒に同行した研究者は、この光景を眺めながら、「30年前に初めてこの村に来た時は、鬱蒼とした林が広がっていたのになあ」と呟いた。

タンザニアでは、発展する都市部と農村部の経済格差の拡大が問題となっている。経済成長に伴い物価が高騰する中、めばしい産業の無い農村部では、林を伐って農地を拡大し、薪炭材や食糧の販売することで現金収入を得てきた [近藤 2016]。同様の背景で林が減少している調査地の村で、私は外来樹 *Toona ciliata* (センダン科) と在来樹を混交させた林をつくる研究を行なっている。この *T. ciliata* は東南アジア原産の外来樹で、タンザニアにはドイツ植民地期に持ち込まれたと

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

されている [伊谷 2023]。調査地の村に持ち込まれたのは 70 年ほど前だ。近所の教会で育てられていたこの樹の苗を、村人が持ち帰ったのが始まりで、現在も村内で自家消費用として小規模に育てられている。この樹は、環境条件が良ければ植林後 10 年で収穫可能な大きさに育つ早生樹であるのに加えて、家具をつくるのに最適な硬く美しい材がとれるという性質をもつ。この木と在来樹を混植して経済的価値のある林を広げることで、環境の修復を行ないつつ、村に林業という新たな生業基盤を構築するのが、研究の先にある目標だ。

この外来樹 *T. ciliata* は村のあちこちで育てられており、いまのところ、自然林への侵入や環境への悪影響などは確認されていない。村人からは「ウムレームワ」や「ムセンデレレ」と現地語（ニャムワンガ語）の名前がつけられ、机やドアなどをつくるために木材が利用されている。外来樹と聞くと“よそ者”という感じがするが、これほどまで



写真 2 製材中の *Toona ciliata*
(調査地で筆者撮影)

に村人に親しまれていると、よそ者というかんじは全くない。

「外来植物」の定義とその歴史

外来植物とは、在来植物に対する語で、外国から入ってきた本来自生していなかった植物 [沼田編 1988] を指す。渡り鳥などの野生動物が原因となって侵入した場合もあるが、人が持ち込んだケースも多い。その中には、人為的に持ち込まれた植物もあれば、海外からの船舶や航空機の積み荷に種が混入・付着しており、意図せずして持ち込まれた植物もある。

外来植物が世界的な問題として取り上げられるきっかけとなったのが、1993 年に発効された生物多様性条約だ。この条約の中には、「生態系、生息地若しくは種を脅かす外来種の導入を防止し又はそのような外来種を抑制若しくは撲滅すること」という締約国の義務が記されている (第 8 条 (h))。

このように侵入の防止や撲滅が訴えられている外来植物だが、意外にも身近にたくさん生息している。たとえば、近所の鴨川を散歩すれば、シロツメクサ、ハルジオン、オオイヌノフグリなどの外来草本植物や、ニワウルシ、ニセアカシアなどの外来樹を至るところで見ることができる。シロツメクサは、小さい頃に 4 つ葉のクローバーを探したり、花冠をつくったりした経験のある人も少なくないだろう。このように一部の外来植物は、もはや日本の自然景観の一部とっていいくらい馴染んでしまっている。

外来植物の帰化

シロツメクサのように、「人力によって、意識的にせよ、無意識的にせよ、ひとつの植物が本来の生息地から、そのものが自生していない新しい地域にもたらされて、野生化して繁殖し、その植物の歴史を知らなければその土地本来の自生種と一見区別のつかないようになっていく状態」[小倉 1968]の植物を帰化植物という。多くの日本人が在来樹と認識しているであろう梅や桃の樹、茶の樹も、実は中国から人為的に持ち込まれた帰化植物だ。タンザニアでは、約6世紀に持ち込まれた中南米原産のパンヤノキ *Ceiba pentandra* [Blench and Dendo 2006] や、10世紀に持ち込まれたインド原産のマンゴー *Mangifera indica* [Yadav and Singh 2017] が帰化植物の例として挙げられる。

ここで気になるのが、私が調査地に植えた *T. ciliata* は外来植物なのか、帰化植物なのか、という点だ。聞き取り調査は行っていないため具体的な比率は不明だが、村人の半数以上は在来樹と認識しているようだった。村に持ち込まれてから既に70年も経過しており、村のあちこちで育てられ、さらに現地語の名までつけられた *T. ciliata* は、外部者の私の目では村の自生種と一見区別がつかないことから、帰化しつつある外来樹といえる。

村人がその名を知らない樹々たち

話は変わるが、私は調査の一環として、村内の植生を把握するために樹木の標本収集を行っていた。村中の樹の枝葉を集め、新聞紙に挟んで乾かす。そして、その樹のニヤム



写真3 調査地に生育するパンヤノキの巨木とマンゴーの樹々
(調査地で筆者撮影)

ワンガ語の名と利用法、花の時期などを村人に聞いて調べる。さすが日常的に林を利用しているだけあって、どの村人も樹々の名前や利用法に詳しい。しかし、それらの樹種の中には、どの村人にも名前を知られていない樹々があった。

それは、ヒペリカム *Hypericum* spp. と *Stereospermum kunthianum* だ。ヒペリカムは黄色い可愛らしい花を、*S. kunthianum* はピンク色の花の綺麗な花を咲かせる。おそらく観賞用樹木として近隣の村から運ばれてきたのだろう。いつ、誰が村に運んだのかは不明だが、ニヤムワンガ語の名がまだつけられていないこと、加えて、村内には数本しか生育していないことから、*T. ciliata* よりも比較的最近になって、村に持ち込まれたと予想される。

このように、国内の生物であったとしても、本来分布していない地域に導入された生物は「国内由来の外来生物」として、問題視されている [環境省 2016]。しかしながら、村人たちが他の地域から樹種を持ち込むのを

止めるのは不可能だろう。木材として有用な樹や、美しい花を咲かせる樹、美味しい果実をつける樹を村に持ち帰って育てたくなるのは当たり前だ。これらの樹種が自然林に侵入し、環境に悪影響を及ぼすようなことが無いよう注意深く観察することが、唯一できることだと考える。

外来樹をどのように見るべきなのか

以上より、起源に着目して調査地の樹々を大まかに分類すると、次の4種類に分けられる。

- a) 在来樹：調査地にもともと生育する東アフリカ原産の樹種
- b) 帰化植物：数世紀前に導入されタンザニアに定着している樹種 (E.g. *C. pentandra*, *M. indica*)
- c) 帰化しつつある外来樹：村人によって村に持ち込まれ、既に約70年経過しており、在来樹と一見区別がつかない樹種。ニャムワンガ語の名がつけられている (E.g. *T. ciliata*)
- d) 国内由来の外来樹：村に持ち込まれてからそれほど期間が経っておらず、まだニャムワンガ語の名がつけられていない樹種 (E.g. *Hypericum* spp., *S. kunthianum*)

このうち、問題のある外来樹の持ち込みは一体どれだろうか。人間による自然への影響をなるべく無くそうとする自然保護の観点から見れば、樹種bもcもdも全て排除すべ

きなかもしれない。調査地の村に来たばかりの頃の私であれば、樹種bはともかく、樹種cとdは村から排除すべきだと言っていただろう。

しかし、村で生活しながら村人と樹との関わりを観察する中で、私は外来樹に対する見方が変わり、やや肯定的に捉えるようになった。最初は“よそ者”と村人たちから認識されていた外来樹は、徐々に村人に受け入れられ、名前をつけられ、長い時間をかけて村の景観の一部となっていく。このような人間による外来樹の移動と定着は、千年以上前から現在まで世界中で行なわれてきたことであり、自然なことだといえる。近年、渡り鳥やサルなどの野生生物による種子散布が植生回復や生物多様性の維持に貢献していると評価されているが、それらの野生動物と同様に、人間が種子散布という役割を果たしているという見方もできるのではないだろうか。

しかしながら、人間による外来樹の移動を全面的に容認するのは難しい。人間による外来樹の移動は、野生生物に比べて、移動距離が長いうえ、一度に大量の植物が持ち込まれる傾向にある。そのため、外来樹が持ち込まれた際、その土地環境に与える影響は必然的に大きくなってしまう。

簡単な問題ではないが、人間による外来樹の移動に関しては、禁止と容認のあいだにある妥協点があっても良いのではないだろうかと私は考えた。

引用文献

伊谷樹一. 2023. 「新しい生態系をつくる」伊谷

- 樹一編『つくる・つかう』京都大学学術出版会, 165-200.
- 環境省. 2016. 生態系被害防止外来種リスト. <https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/files/gairai_panf_a4.pdf> (2023年5月18日)
- 国土交通省. 2013. I 外来植物対策の考え方. <https://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/kankyo/gairai/pdf/tebiki03.pdf> (2023年5月18日)
- 近藤 史. 2016. 「半乾燥地域の林業を支える火との付き合い方—タンザニア南部, ベナの農村の事例から」重田真義・伊谷樹一編『争わないための生業実践』京都大学学術出版会, 181-213.
- 沼田 真編. 1988. 『生態学辞典』築地書館.
- 小倉 謙. 1968. 『植物の事典』東京堂出版.
- Blench, Roger and Mallam Dendo. 2006. The intertwined history of the silk-cotton and baobab. Paper presented at: 4th International Workshop for African Archeobotany. Groningen.
- Yadav, D. and SP. Singh. 2017. Mango: History Origin and Distribution. *Journal of Pharmacognosy and Phytochemistry* 6(6): 1257-1262.

インド北部・写本調査ガイド

森 口 遥 平*

本稿では、2022年夏にインド北部のウッタラプラデーシュ州の2都市で実施した写本調査について報告する。報告者の研究テーマはスーフイズム（イスラームの神秘主義）であり、目下のところ、17世紀ムガル帝国で活躍したチシュティー教団サービリー派スーフイー（スーフイーは、イスラーム神秘主義に基づいて修行や思弁をおこなう人のこと）、ムヒブラー・イラーハーバーディー（Muhibb Allāh Allāhābādī (Ilāhābādī)）（1648年歿）の思想を研究している。同思想家は多作で知られたが、その著作のほとんどは出版されておらず、21世紀になって今なお、手書きで記された写本がインド各地の図

書館などに所蔵されている状態である。そのため、彼の思想を研究するためには、通常の実験研究（西洋哲学など）と異なり、まず手始めに、テキストそのものをインドで収集する必要がある。本報告が、今後インドでの写本調査を計画している学生や研究者のお役に立てば光栄である。なお、記載された情報は、全て2022年夏時点のものである。

①アリーガル（Aligarh）

報告者が最初に訪れたのは、首都デリーから電車で2、3時間ほどの小都市アリーガルである。この地には、アリーガル・ムスリム大学という総合大学があり、イスラーム関連

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 アリーガル・ムスリム大学のモーラーナー・アーザード図書館

の文献を数多く所蔵するモーラーナー・アーザード図書館 (Maulana Azad Library) が併設されている。この図書館には写本を専門に扱う部署 Manuscript Division があり、報告者はこの場所で人生初の写本調査をおこなった。ここからは、報告者が訪問した初日から写本のデータを入手した最終日までの経緯を時系列で記していこう。

まずは、図書館 1 階の事務室で利用者登録をおこなう。京都大学からの紹介状を提出して、申請書を記入したうえで、別室の係員に申請書と顔写真を渡す。こうして 2 週間有効の来訪者カードを受け取る。今後は毎日の入館時に、このカードを入口の受付職員に見せるとともに、中央閲覧室の受付でもう 1 回見せて、来訪者台帳に名前を記載することになる。なお、図書館内では英語はつうじる

ものの、ヒンディー語やウルドゥー語での会話だと対応がスムーズになる。

次に、2 階の写本閲覧室に入室する。入口は行ってすぐのところ大きな机があり、そこで写本を閲覧することになる。いわゆる誕生日席に同部署の責任者が座っているため、「これから 2 週間、写本調査します。日本から来た森口です」と挨拶する。この部署内では、アラビア語とペルシャ語もつうじる。なお、初来訪時には簡単なものでよいので、必ず日本から手土産を持参して渡すようにしたい。このことで、今後の利用時にさまざまな便宜を図ってくれることがある (もちろん、図ってくれないこともある。報告者は扇子を持参した)。

責任者から「写本の写真は、決して撮らないでほしい」と厳重な注意を受けたうえで、いよいよ写本の調査を開始するわけだが、インドに滞在したことがある方は、現地で「〇〇禁止」と言われても、実際は周りの人が平然とおこなっていたり、行為中に咎められてもゴネたら見過ごしてもらえたり、という経験があると思う。ただし、この部署内では、指示に従い、撮影は慎んでほしい。たしかに写本のコピー代は高価なのだが、もしあなたが勝手に写真を撮っていたことがバレた場合、今後の来訪者の写本閲覧が制限される恐れがある。「旅の恥は掻き捨て」とはいかず、自分よりあとに訪れる研究者のことを常に考慮する必要がある。

壁際にアラビア語資料とペルシア語資料のカタログがおいてあるが、前述の責任者曰く、カタログには記載されていない資料もあ

るとのことだったので、全ての資料情報が個々に記載されたカード目録をアラビア文字順に手繰っていく。そして、いよいよ目当ての資料を見つけたら、閲覧室まで持ってきてもらうように依頼する。この依頼は必ず紙でおこなうのだが、閲覧室には特に所定の様式の依頼書はないため、報告者は100円均一ショップで買っていったメモ帳に書いてはちぎって、提出していた（失礼ではなかったと信じたい）。

しばらくすると係員が写本を持ってきてくださるのだが、それを受け取って一安心、というわけにはいかない。というのも、カード記載の書誌番号と実際の資料に付された番号に食い違いがあり、別の写本がやってくることもあるためだ。また、ごく稀にだが、係員が取り出す写本を間違えることもある。というわけで、まずは手元に来た写本が本当に目当ての写本なのかを確認する。

そして、正しい写本ならば、そのなかのどこからどこまでのコピーを取りたいかをメモする。その際に、ひとつの著作がひとつの冊子になっているなら問題ないが、複数の著作がひとつの冊子にまとめられているケースが多々あるので注意が必要である。自分が入手したい写本は何葉から何葉かをしっかり確認しなければならない（「葉」は写本における専門用語で、紙1枚の表裏で1葉。ページ換算だと2ページ分。申請用紙に記入する数字が、「葉（フォリオ）」か「頁（ページ）」かは要注意）。

以上の過程を繰り返して、自分が取りたい写本とコピー箇所のリストをつくる。私自身

は2週間の滞在で、18点の写本を確認した。そして、リストが完成したら、いよいよコピーの申請をおこなう。アラーガル・ムスリム大学の場合、紙でのコピーは対応しておらず、全てデジタルコピー、つまり、写本のデジタルデータを渡してもらう形式となっている。

この申請も紙でおこなうのだが、やはり申請書は存在しないため、報告者はルーズリーフに書いて、提出していた（失礼ではなかったと信じたい）。ちなみに書く内容は、「Dear 図書館長、写本 No. xx の何葉から何葉まで複写してください。（取りたい写本分繰り返す）自分の名前・所属」だったと記憶している。

さて、この申請書を書いたら、あとはつづがなくデータが手元にやってくる…なんてことはない。データ入手までには相当の手順が存在する（おそらく雇用と職務を設けるために、あえて段階を増やしていると思われる）。そのため、必ず時間に余裕をもって、対応を依頼する必要がある。

まず、申請書を私が1階事務室に持っていく。事務員が内容を確認したのち、図書館長に回す。図書館長が押印して、事務室に戻ってくる。私がそれを受け取って、別室の経理窓口へ提出して、所定金額を払う（インド人は1葉10ルピー、外国人は1葉1USDドル、約8倍！）。もらった領収書を写本閲覧室にいる責任者に渡す。ここまでが前半である。

後半は、まず責任者がコピー係に指示を出し、彼らが手分けして写本をスキャンする。



写真2 イラーハーバーディーの墓廟

そして、コピー係から責任者に終了報告がなされる。その後、責任者から声がかかるので、USBなどのデジタルデバイスを責任者に渡す。USBがデータ係に手渡されて、データが移される。データ係は責任者にUSBを渡す。責任者は私にUSBを渡す。終了。たしかに長いですが、その分やり遂げた達成感がある。

こうして、アリーガルで無事に写本データを取り終えた報告者は次の街に向かった。なお、今回は利用しなかったが、アリーガル・ムスリム大学の歴史学科図書室にも多くの文献コレクションが所蔵されている。機会があれば、今後ぜひ訪れたい。

②アッラーハーバード／プラヤーグラージ (Allahabad/Prayagraj)

次に報告者が赴いたのが、ウッタルプラデーシュ州の州都アッラーハーバードである。州都だけあって、インドの各都市から国内便のフライトが存在するが、空港と都市中心部は車で40～50分ほどの距離がある。なお、報告者の研究対象のイスラーム神秘思想家が生まれた都市であり、その名は彼の名前の由来にもなっているのだが（アッラーハーバードはイラーハーバードとも呼ばれており、イラーハーバーディーとは「イラーハーバードの出身者」の意）、同地のヒンドゥー教的伝統を尊重するとの理由で、2018年に「プラヤーグラージ」へと都市名が変更されている。この街では、イラーハーバーディーの子孫が今も運営するスーフィー修道場（ハーンカーという）で写本収集をおこなった。

まず、初めて訪問した日は、道場主に挨拶をした。当然その際に手土産を渡すことを忘れない。日本からの研究者が来たのは初めて、とのことで喜んでくださった。続いて、イラーハーバーディーのお墓にお参りする。道場から少し離れた街の一角にあったが、今でもそのまゝで祈ってる人々がいた。その後、道場の事務室に保管されている各写本を、子孫の方のお立会いのもと、確認する。ここでの調査はいたってシンプルで、写本の必要な箇所をひたすらデジタルカメラで撮影していった（無料!）。もちろん、撮影の合間には、報告者の世話をしてくださった子孫の方が同年代であったこともあり、いっしょ

にチャイや噛みたばこ（タバコの葉と石灰の混合物を口に入れて、ガムのように噛む）を味わいつつ、スーフイズムについてはもちろん、お互いの家族の話などをした。一度は道場の近くに住む、ヒンドゥー教の司祭の家に遊びに行ったこともある。宗教の違いはあるけど、仲の良い友達とのことだった。

さて、実は報告者には調査をするまで、心配していたことがあった。それは「外国からいきなりやってきて、ただ写本の写真を撮って、さっさと帰っていく」みたいな感じにはしたくない、ということだ。やはり相手の生活空間に立ち入り、大切にしているご先祖様の形見に触れるわけなので、最大限の尊重と

感謝の意をもって接する必要があるし、私からも何かを提供したいと思っていた。今回の滞在中にともに語り、食事し、時々バイクで街を走り回ったことが、相手にとっても楽しい思い出になったことを願ってやまない。もちろん、子孫の方とは今でもSNSでやり取りを続けている（今この原稿を書いているときも、ビデオ通話がかかってきた）。

現地にいる間に収集した写本を読んでいると、日本にいながら、現在のインドはもちろん、写本がつくられた当時とも自分がつながっているように感じる。この感覚を楽しみながら、難解な思想書を今後も読み解いていきたい。

フィールドを決める

—私、この町が好きです—

岩井華代*

「いい町がみつかるといいね」

これは、宮崎駿監督作品『魔女の宅急便』において、旅立つ娘に対し、父親が言った言葉だ。魔女の子は13歳になると、一人前の魔女になるために、1年間の修行に出なければならない。13歳になった主人公のキキは、黒猫のジジと連れだって満月の夜に故郷を発

つ（『魔女の宅急便』より）。

2023年1月16日。フィールドワークを目的としたはじめての海外渡航に臨む。行きは機内での、なんとも言えない憂鬱さの理由は明らかだった。何かしらの「結果」をもって帰国しなければならないのだ、という重圧が重くのしかかっていた。

2ヵ月間のフィールドワーク中、私はこの

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

主人公に幾度となく共感せざるを得なかった。なぜなら、主人公とフィールドワーカーとのあいだには、共通の経験を見出すことができるからだ。

ひとつは、手助けしてくれる人々の存在だ。黒猫のジジ、パン屋のおソノさんとその夫、絵描きをしているお姉さんウルスラ、犬のジェフ、同年代の男の子トンボ等々。これらの人々の協力を得て、主人公は100分の映画のうちに何度も降りかかってくる困難を乗り越えていく。2つ目は、感情の起伏の激しさだ。主人公は作中、些細なことで気分が落ち込み、また些細なことで前を向くきっかけを得ていた。主人公が思春期の女の子であるということも関係しているだろうが、実際フィールドにおいても同じことが起こる。その一喜一憂を繰り返しながら、しかし確実に前へ進む姿が重なる。

今回の渡航の第一の目的は、「自分の調査地を決める」ということだった。入学して以来、自身の研究テーマを定められない期間が続いた。もちろん、調査地も決まらなかった。渡航の1ヵ月半前に現在のテーマが決まり、調査地として入りたいと思う場所が決まった。しかし、実際にその地を訪れたことがあるわけではないため、調査地に確信をもつための渡航でもあった。

自分の「フィールドを決める」、地域研究を専門とする研究者が行なう、重要な決断のひとつ。その過程に焦点を当てていこうと思う。

1月19日朝7時タイ王国チェンマイ県発のバスに乗り、西隣の県メーホンソン県クンユアムに向かう。ここが、私が調査地とする

「予定」の場所だ。20日から3日間、「タイ日友好祭」なるものがあると聞きつけ、予定を変更し現地に向かうことにした。バスに揺られること8時間、15時にクンユアムに着く。バスを降りて、ホストマザーが迎えに来てくれるのを待つ。ひとりバス停で待っていると、風がふいた。その風の感触で、あ、この町好きだな、と理由もなく思った。これが、クンユアムとの最初の出会いだった。

その後一旦チェンマイに戻り、2月13日からメーホンソン県周遊1ヵ月の旅を開始する。この旅の趣旨は、第二次世界大戦で亡くなった日本兵のために建てられた慰霊碑を巡ることだ。

第二次世界大戦中の1941年12月21日、日・タイ同盟条約により、タイ政府は日本がビルマ戦線のためにタイ国土を通過することを認める〔市川1987〕。1944年3月、日本軍およびボース率いるインド国民軍は、インド東部インパールへ侵攻することを目的とした作戦、インパール作戦を実施する。しかし、戦略ミス、不十分な補給、相手側の新戦術、雨期の到来により、日本軍は撤退を余儀なくされる〔読売新聞社1980〕。その一部が、メーホンソン県に入り、チェンマイに向かった。その途中で、多くの兵士たちが息絶えた。現在、メーホンソン県各地に、戦争遺跡および、戦後建てられた慰霊碑やミュージアムなど、数々の戦争モニュメントが存在する〔早瀬2007〕。

今回、それらのモニュメントを訪れるため、チェンマイを出発しバスでメーホンソン県を周遊する計画を立てた。これらモニュメ



写真1 ランニング中の景色

ントと地元住人がどのように関わっているのか、ということをはっきりさせるのが本調査の目的だ。クンユアムに2週間、その他の都市メーサリアン、メーホンソン市、パーイに各4日間ずつ滞在した。

先に挙げた『魔女の宅急便』との共通点のひとつ目、手助けしてくれる人々の存在、は今回の調査において非常に大きかった。私が知る人も、私を知る人も、ほとんどいない都市をまわったからだ。調査は、住人の方の協力なしにはあり得なかった。

なかでも、クンユアムでの経験が印象深い。なぜなら、調査とは別に、関わったさまざまな人々が「この土地で生活する」ことを手助けし、教えてくれたからだ。

2回目に訪れたときは、まず宿探しからはじまった。1回目訪れたときにお世話になったホストマザーの家は、調査対象のモニュメントがある中心地から離れているため、新たに宿を探す必要があった。事前に予約すると高くつくので、現地入りしてから直談判すると決めていた。住人に安く泊まれる場所を聞



写真2 スア・ルンに使用する材料をすり潰す



写真3 揚げる直前のスア・ルン

いてまわった。結局、宿を決めるまでに3人の住人の世話になった。

あるときは宿探しのときにお世話になったクリーニング屋のお母さんと、ランニングをした。マラソン大会で何度もメダルをとっているほどの実力者だ。町の中心地から少し離れたと、そこには田園風景とそれをぐるりと

囲む山々が広がっていた（写真1）。走っていると、この土地の地形がどうなっているのか、身体で感じることができる。これが、クリーニング屋のお母さんの生活の一部だった。

また、胃袋も完全につかまれた。クンユアムの人口のマジョリティを占めるタイヤイの人々の料理が美味しかった。1回目に訪れたときに宿泊したホストマザーの家では、実際にタイヤイ料理を作った。なかでもお気に入り、ヌア・ルンという肉団子だ。材料をすり潰すところから一緒に作った（写真2, 3）。

クンユアムが印象深い理由はもうひとつある。それは、この土地から新たに人の縁が繋がっていったからだ。1回目の滞在時に知り合った、タイ人日本語教師が手助けをしてくれた。次回メーホンソン県に来るときにはメーサリアンに立ち寄るとい話をしたところ、彼女の友人がこの都市で同じく日本語教師をしていると教えてくれた。しかし、うかつなことに私はあまり重要なものとして記憶しなかった。

約3週間後、いざメーサリアンを訪れるも、調査が思ったようにいかず、不安が頭をもたげ始めていた。あきらめずに寺で僧侶に話を聞いていたところ、ある高校の近くには日本兵が埋められている場所がある、と教えてくれたので行くことにした。高校を訪問すると、日本語教師のもとへ案内された。私が改めて事情を説明しようとする、クンユアムのタイ人日本語教師の名前が挙げられ、彼女を知っていますよね、と言う。「クンユアムに日本兵のことを勉強している日本人の女の子が来た」という話が事前に共有されてい

たらしい。しかし、私は僧侶に言われなければこの高校を訪ねる予定はなかった。中心地からは少し離れたところにある高校だった。

結局、昔はこの近くに日本兵のお墓があったが、もうなくなってしまった、という。しかし、日本兵のことについて知っている人や野戦病院となった寺院に連れていってくれた。さらに、同僚の英語教師と共に通訳に協力してくれた。その後、夕食に誘われ、私たちはひとつの鍋を囲んでタイスキを食べた。必然か、偶然か。しかしこの素敵な縁を繋ぎに、またこの地を訪れたいと思うのだった。

『魔女の宅急便』との2つ目の共通点、感情の起伏の激しさについては、多くのフィールドワーク初心者の共感を得られるだろう。何か予定を入れていないと不安。予定を入れてさまざまな情報を得たはいいが、この情報をどうすればいいのだろう、とふと我に返り絶望的な気持ちになる。でも、次の日にまた新たな出会いや学びがあると、前向きな気持ちになる。この繰り返した。正直、自分自身の気分の不安定さには疲れることがあった。

フィクションでは、主人公が落ち込むと、別の登場人物が救世主のように出てくることが多い。現実、そう都合よく事は運ばない。それでもフィールドワーカーは、自分と向き合い、現地で出会った人と向き合い、それらをひっくるめて言葉を綴っていくのだと思う。その道を、まだ歩き始めたばかりだ。

本渡航の第一の目的は、「フィールドを決める」ということだった。はじめの直感、現地で人々と紡いだ時間が、私に確信させた。この私の気持ちを端的に表すものとして、

『魔女の宅急便』の最後のセリフを引用して終わることにしたい。

「お父さん、お母さん

お元気ですか。わたしもジジもとても元気です。仕事の方もなんとか軌道にのって、少し自信がついたみたい。落ち込むこともあるけれど、私、この町が好きです。」

引用文献

- 早瀬晋三. 2007. 『戦争の記憶を歩く—東南アジアのいま』岩波書店.
市川健二郎. 1987. 『日本占領下タイの抗日運動—自由タイの指導者たち』勁草書房.
宮崎駿監督. 1989. 『魔女の宅急便』スタジオジブリ.
読売新聞社. 1980. 『昭和史の天皇 9』.

ブータンにおける古道の現代的活用とその可能性

—Shingtala Kezang エコトレイルを事例に—

菊川翔太*

はじめに

2022年9月から1ヵ月間、ヒマラヤの南麓に位置するブータン王国（以下、ブータン）に滞在した。首都のティンブーから車で2日離れた東部の村に滞在した。滞在の目的は、大学院での研究テーマを探ることだった。滞在先の村では農家でホームステイをし、仏教の儀礼に参加したり、農業を手伝ったり、村人に簡単な聞き取り調査をしたりしていた。

滞在中も終盤に近づいた9月末のある日、地方都市タシガン（Trashigang）に用事があり行くことになった。午前中の作業が終わり、午後からは住宅街の観察のためひとりで

散歩にでかけた。15分ほど散策していると、少し前の坂から一本の道が山の方まで続いているのが見えた。その道のスタート地点まで向かった。“Shingtala Kezang Eco-trail”というエコトレイルであった。

その頃、慣れない異国の地での暮らしから早く日本に帰りたいと思うようになっていた。言語も通じない、研究テーマも見つからない。滞在先の農家や周囲の方からお世話になっているのに何もできない自分の未熟さを痛感していた。気持ちをリフレッシュしなかったからか、その道に引き寄せられるように登った。

1時間弱のトレイルはブータンでの日々を

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

振り返る機会になった。登り終わると、プータンに居ること、プータンで研究できていることそのありがたみを再認識していた。自然に囲まれその土地の歴史や文化が刻まれたトレイルがもつ可能性を感じ、本トレイルについて調べていくことにした。

2023 年春の再渡航の際に、本トレイルを管轄しているタシガン森林局の局長と担当者の方にインタビュー調査を実施した。本稿は、そのインタビュー内容および、本トレイルに関する新聞記事の内容をもとに作成した。

まず、本トレイルのルート、歴史、2022 年のエコトレイルとしての整備を中心にその概要をまとめる。次に本トレイルの活用例として、2022 年 10 月に実施された Walk For Health プログラムについて紹介する。最後にプータンにおける古道の現代的活用の可能性について述べる。

Shingtala Kezang エコトレイルの概要

本トレイルは、地方都市タシガンから隣接するサムカル村 (Samkhar) までを結ぶ

3.4 km の道である。以下では私の経験をもとにそのルートを説明する。スタート地点から進むとすぐに急な上り坂となった。そこから数分登るとパッと視界が開けてタシガン市街を一望できた。小学校や病院、裁判所、タシガン県庁が見渡せた。

ここから少し進むと、10 本程度ダルシン (Dharshing) が立ち並んでいるのが見えてきた。ダルシンは、地面に垂直に建てられた木の竿に布がつけられたもので、チベット仏教の経典が書かれている。このダルシンにはどのような祈りが込められているのだろうか。ダルシンの向かい側に設置されている休憩所で足を休めた。休憩所から進み標高 1,220 m 程度まで緩やかに登ると、ヒマラヤ松の森に差し掛かった。木々の合間からヒマラヤのダイナミックな景観が見える。改めて自分がプータンに居ることを実感した。その森を抜けると、次第に緑豊かな亜熱帯の森に入った。人里から離れた静かな場所であり、鳥のさえずりが聞こえてきた。

この地帯は 60 種類以上の鳥類、37 種類以



写真 1 Shingtala Kezang のスタート地点

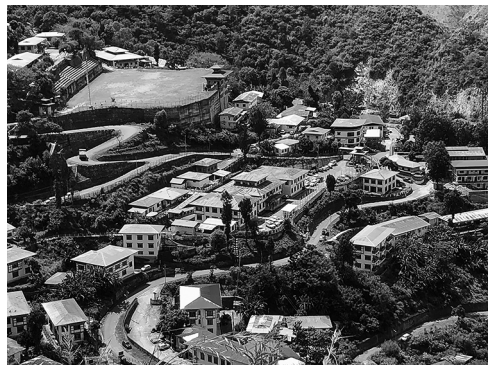


写真 2 タシガン市街の風景

上の蝶、ランゲールやサル、イノシシなど多様な動植物の生息地となっている [Nenten Dorji 2022]。亜熱帯の森を進むと、小さな溪谷が見えてきた。溪谷の底に着くと小川が流れていて、冷やとした空気が肌に触れた。小川を渡ると道は平坦になった。1時間ほど歩きTシャツは汗でびしょりだった。しばらく歩くとサムカル村の集落が見えてきた。もうすぐ終点だ。最後に平坦の道を早足で駆けると終点のサムカル村の仏塔、ジャンチュウブ・チョルテン (*Jangchub chorten*) に辿り着いた。トレイルを登りきった解放感と程よい疲労感から心も体もリフレッシュされた。

以上のルートは、かつてから古道として利用されてきた道である。本トレイル名はサムカル村最後のコチェイ (*khochey*)、Shingtala Kezang にちなんでいる [Trashigang Divisional Forest Office 2022]。ちなみにコチェイとは、1651年にブータンが統一される以前、ブータン東部の地域を支配していた地方首長の子孫のことである。

古道として利用されてきたのは、サムカル村からタシガンに至る自動車道が開通するまでであった。自動車道の開通以降は、草が生い茂り利用されなくなっていた。その後、2022年7月にタシガン県森林局のもと、エコトレイルとして整備された。タシガン県森林局での聞き取りによると、本トレイルを整備した目的は以下の3点であった。

1点目は、タシガン住民へリラクゼーションの場を提供することである。ブータンでは2020年からの新型コロナウイルスの感染拡

大によりロックダウンが2度実施された。コロナ禍を経て外出の機会を求めてトレッキングやハイキングに行く人が増えた。市街地に建物が密集しているタシガンでも、住民へトレッキングの場を提供するため本トレイルが整備された。

2点目は、サムカル村の住民へ利益を生むことである。サムカル村の住民は、本トレイルで移動すると30分でタシガンに辿り着ける。そのため、タシガンで役所、銀行、病院、商店などに用事がある際には自動車道よりもショートカットのコースとなる。実際に9月に登った際も、少数ではあったが本トレイルを利用する方が見られた。

3点目に、森林火災やごみ問題への意識を喚起することである。2022年にエコトレイルとして整備された際、スタート地点の看板、森林火災の啓発の看板、休憩所、ごみ箱などが設置された。森林火災の啓発の看板は、森林火災への意識を高めるため設置された。また、ブータンではスナックやペットボトルなどのゴミが道端に捨てられているケースが散見されるが、本トレイルではゴミ箱が



写真3 Walk For Health プログラムの様子
(タシガン県森林局提供)

利用されていた。森林局への聞き取りによると、“eco-trail”としての計画からそうした看板やゴミ箱を設置したとのことであった。ちなみにこの整備は、タシガン県森林局が主導し、Vanishing Treasure, Bhutan Tiger Center, Department of Forest and Park Services からの資金援助により実施された。費用は約 20 万ニュルタム（日本円で 30 万円相当）だった。整備はタシガン県森林局が主導で行なったが、現在の管理はサムカル村のコミュニティフォレストのグループが担っている。

Walk For Health プログラム概要

つづいて、本トレイルの活用例として 2022 年 10 月 4 日に実施された Walk For Health プログラムを紹介する。本プログラムはタシガン県森林局に加え、タシガン県庁の各部局、タシガン病院などの協働プロジェクトとして実施された。タシガン県庁の全公務員の参加が求められ、実際に 100 名を超える公務員が参加した [Sonam Darjay 2022]。

本プログラムの目的は主に 3 点ある。1 点



写真 4 Walk For Health プログラムでの健康診断
(タシガン県森林局提供)

目に、本トレイルの宣伝および利用促進のため実施された。2 点目に、公務員間の部局を超えた交流を図るためである。タシガン県庁の公務員は普段の業務は各部局に分かれており部局をまたぐ交流が少なかった。3 点目に、参加者への健康への意識を高めることである。タシガン市街地は斜面に立地しており運動やリラクゼーションの場所がほとんどない。また、タシガンを含めブータンでは糖尿病や、高血圧、肥満などの生活習慣病が増加している。そのため参加者の健康への意識を高めるため、ゴール地点でタシガン病院の医師による健康診断が行なわれた。

おわりに

本稿では、ブータン東部タシガン県にある Shingtala Kezang エコトレイルの概要および活用事例について整理した。

本トレイルはかつてから利用されてきた古道を 2022 年にエコトレイルとして整備したものであった。トレイル周辺は多様な動植物の生息地であり、道沿いには経文旗のダルシンや仏塔のチョルテンが見られる。現在はリラクゼーションの場や市街地への近道となっており、環境保全に関する看板も設置されている。また利用者の心身の健康向上を目指した Walk For Health プログラムも実施されている。このようにトレイルの整備・活用に向けた取り組みが行なわれている。一方で、森林局の聞き取りからも、ゴミの回収や草むしりなどを含め今後誰がどのようにトレイルを管理していくかは課題があるとのことだった。

ブータンには本トレイル以外にも古道の活

用事例がみられる。たとえば、ブータン西部にあるタクツァン僧院は標高約 3,120 m にあるチベット仏教信仰の聖地であり、僧院までのルートは観光客やブータン人の巡礼路として活用されている [吉田・浅川 2016]。また、2022 年に整備された Trans Bhutan Trail は、西ブータンのハから東ブータンのタシガンまでの 403 km をつなぐ道であるが、このトレイルも 1960 年代にブータンの東西をつなぐ高速道路が建設されるまで巡礼路として利用されていた [Trans Bhutan Trail]。

古道の現代的活用の取り組みでは、豊かな自然とともにその土地の歴史や文化が刻まれた古道をいかに持続的に整備・活用するかが模索されている。ブータンの開発目標である国民総幸福 (GNH) の向上も、持続的な経済発展・文化の保全・自然環境の保護・良い統治を 4 本柱としている。日々の喧騒から

離れその土地の自然・歴史・文化が刻まれた古道を歩くことは、私たちに今ここにいることの価値や素朴な幸せをそっと教えてくれる気がする。Shingtala Kezang エコトレイルをはじめブータンにおける古道の現代的活用の今後に着目していきたい。

引用文献

- 吉田健人・浅川滋男. 2016. 「ブータンの崖寺と瞑想洞穴」『公立鳥取環境大学紀要』14: 51-70.
- Nenten Dorji. 2022. 〈<https://kuenselonline.com/eco-trail-in-trashigang/>〉 (2022 年 8 月 15 日)
- Sonam Darjay. 2022. 〈<https://theworldnews.net/bt-news/an-eco-trail-for-residents-in-trashigang-town>〉 (2022 年 10 月 3 日)
- Trans Bhutan Trail. 〈<https://www.transbhutantrail.com/>〉 (最終閲覧日 2023 年 5 月 31 日)
- Trashigang Divisional Forest Office. 2022. 〈<https://trashigangdfo.wordpress.com/2022/07/08/shingtala-kezung-eco-trail/>〉 (2022 年 7 月 8 日)

Hunter-animal Relationships Changed by Modern Hunting Technology

AKAOKA Yuji*

“We have caught a lot of animals today!”
A hunter in the village, shotgun in hand,
triumphantly holds up the day’s catch. Large

numbers of duiker (a type of ungulate) and
primate carcasses were randomly piled up on
the ground. This was a scene I saw every time

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

I accompanied the villagers on their hunting activities.

The Influx of Modern Hunting Technology and the Bushmeat Crisis in the Central African Rainforests

Bushmeat is the meat of wild animals used as meat. The local people widely use bushmeat as a major source of protein and cash income in rainforest regions around the world [Fa *et al.* 2022], as well as traditional medicines and other uses [Lee *et al.* 2020].

Traditional hunter-gatherers in the Central African rainforests, the setting of this paper, have hunted forest animals using tools made from natural materials, such as tree vines, spears, and crossbows. Anthropologists, who laid the foundations for the early days of African hunter-gatherer research, have vividly depicted hunting activities by hunter-gatherers using traditional hunting tools.

However, in recent years, modern hunting technology, such as firearms and LED lights from outside society, has changed this hunting pattern. With the advent of firearms, hunters can now easily hunt wild animals. The use of LED lights also enable hunters to conduct hunting activities at night actively.

With the advent of modern hunting equipment, coupled with a rapid increase in demand for bushmeat due to urban population growth, there is concern that hunting activity in the Central African rainforests has far

exceeded sustainable levels in recent years.

This situation, where wildlife is threatened with dramatic population declines or local extinctions due to hunting activities exceeding sustainable levels, is called the ‘bushmeat crisis’ [Ichikawa *et al.* 2017]. As mentioned earlier, bushmeat is an essential source of protein and cash income for people living in tropical rainforest areas in their daily lives. The bushmeat crisis is, therefore, a social challenge that could threaten both wildlife conservation and the livelihood security of local people at once.

Life in a Hunting Camp

My research site, Gribé village, is adjacent to Boumba-Bek National Park in Southeastern Cameroon, where the hunter-gatherer Baka and the agriculturalist Konabembe live in the same villages. The two ethnic groups have a hierarchical relationship to a certain extent but are also interdependent, bartering for forest products and agricultural produce.

It is not only Baka who hunt wild animals in the forest but also Konabembe, who sometimes stays in forest camps for a few weeks to hunt wild animals in the forest. Bushmeat wildlife is a valuable source of cash income for them, primarily when they cannot harvest cash crops such as cacaos and bush mangos.

Photo 1 shows one of the hunting camps scattered throughout the forest; during their

stay at the hunting camp, they cook and took naps in huts made from a combination of sturdy wood and leaves cut from the forest. The smoky area is where they smoke the games they catch during their extended stay in the hunting camp. Raw wild animal meat goes maggoty if left for three days. For this reason, they place their dismembered games on an improvised smoker made from tree branches and smoke them (Photo 2).

The hunting activity I accompanied this time was a joint Baka and Konabembe. Once they arrived at the camp and were ready for their extended stay, they set out on a hunting and gathering activity with different roles. Some went to patrol pre-set traps, while others fished nearby. Finally, some stayed behind in the hunting camp to watch for food.

When the hunters returned from hunting, they prepared dinner. Bushmeat from the duiker caught that day was smoked and sold, as mentioned above, so we only ate the entrails of the duiker. The offal of the wild

animal was too bitter for my stomach to accept, as I was used to eating the offal of poultry raised for food in Japan.

After dinner, they sat around the fire and chatted while smoking handmade cigarettes made from plucked tobacco leaves and drinking a pack of whiskey in one hand. Even though they can speak French, Cameroon's official language, Baka and Konabembe speak each other in the local language. As a newcomer to learning the local language, I could not grasp the exact content of their conversations. However, they seemed to be having much fun. Sometimes the names of villagers, Japanese researchers, or Cameroonian researchers were mentioned in the conversation. Was it gossip related to that person, or was it a complaint about that person?

I could see why an anthropologist once described their life in the forest as a 'forest holiday.' It is not difficult to imagine how enjoyable it is for us Japanese to spend time



Photo 1. Hunting Camp in the Forest



Photo 2. Instant Bushmeat Smoker

with our close friends, sake in hand, chatting and gossiping in a place where we can be completely unobserved.

Accompany the Hunting Expeditions Targeting Primates

Although it is late to introduce it, I am studying the conservation of wild primates. My research aims to determine the effects of hunting activities by local people on the ecology and population density of wild primates and to use this information to propose new practical conservation policies for wild primates. In this section, I would like to describe the activities of hunting primates.

The forests around the village of Gribé are home to a total of 13 primates, including great ape species such as gorillas (*Gorilla gorilla*) and chimpanzees (*Pan troglodytes*), eight species of medium-sized primates of the family, and three nocturnal primate species [Hongo *et al.* 2020]. The great ape is strictly forbidden to hunt by the law set Ministry of Forestry and Wildlife (MINFOF, Cameroon). Moreover, the three nocturnal primates are challenging to spot, so villagers do not actively track these primates. Therefore, eight species of medium-sized primates of the family are the main targets of hunting.

Hunting arboreal primates living in high forest canopies with traditional hunting tools is challenging. However, the influx of modern firearms from outside societies changed the

situation, allowing locals to hunt arboreal primates easily; the arrival of firearms formed a new hunter-prey relationship between humans and primates.

During the daytime, it is challenging to target primates in trees due to daylight interference. Therefore, hunters generally hunt primates at dawn and dusk when the sunlight is weak. It is easy to look for arboreal primates when walking through the forest. Once under a group of primates, it is up to the hunter to show his skills. Even for those who hunt wild game daily, targeting primates high up in the trees is challenging. Some hunters are skilled and are sure to hunt primates once they have tracked them down, while others cannot even after tracking primates 5–6 times. Baka, whom I accompanied, was a skilled hunter and shot down an adult male *Guereza colobus* (*Colobus guereza*) with a single blow (Photo 3). The downed colobus still had enough energy to run on the ground,

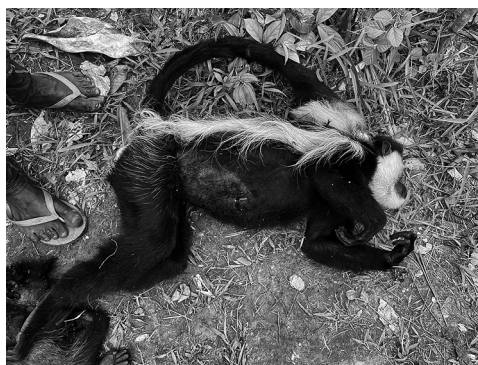


Photo 3. Hunted *Guereza Colobus*

so the Baka hunter finished it by striking his prey on the head with the back of his machete.

Hunting Activities at Night

When night fell, hunters started preparing to go out hunting at night. The forest is dark at night. The forest is covered by a thick canopy overhead, so even at night with a full moon, the forest does not allow light to penetrate. In the night forest, it is challenging to spot primates sleeping in the trees, even for villagers familiar with the behaviour and ecology of forest animals. Therefore, the main target animals for hunting change in the night forest. At night, they hunt duikers.

Some animals, including duikers, have unique organs in their eyes that reflect light. Nocturnal animals use this unique structure in the eye to amplify weak light, enabling them to maintain good vision at night.

When a hunter walks around the forest with an LED light, the eyes of the duiker glow in response to the light. The duiker, perhaps because it has woken up from sleep, does not try to run away for a while when the light shines on it but instead stops where it is. The hunter then aims with his gun and strikes with a ‘Bang.’ This way, even in the dark forest at night, the hunter can find and hunt duikers more easily than during the day.

Hunters may also actively call their prey: they sometimes turn off their LED lights and emit a “Meow, meow” in the dark,



Photo 4. Infant of Blue Duiker

which, according to the hunter, mimics a duiker’s cry. Other duikers and duiker predators are attracted to the call. For example, a Konabembe I accompanied on a hunting trip once caught a blue duiker (*Cephalophus monticola*) cub alive and made it cry. The hunter’s call sounded similar to its cry (Photo 4).

Hunter-animal Relationships Changed by Modern Hunting Technology

The scene described at the beginning of this article was when the hunters returned from their night hunting activities. Piles of carcasses of captured prey were piled up in front of me.

In the previous studies on hunting activities using modern hunting technology such as

firearms and LED lights, the wild animals hunted are often only given as numbers. There is probably no doubt that hunting at night with firearms and LED lights is unsustainable. However, describing the bushmeat crisis in terms of numbers alone probably miss something important and more about the impact of the bushmeat crisis on the region.

During my research, I accompanied villagers hunting with firearms several times. Still, I did not find the game of life between hunter and hunted that anthropologists have depicted in the past. Rather than a struggle for life, I felt it was more like a one-sided slaughter of wild animals. Bullets fired at duikers, especially during nighttime hunting activities, were rarely missed. It is no exaggeration to say that hunters killed every duiker they encountered in the nighttime hunting activities I accompanied.

The negative impact of modern hunting technology, such as firearms and LED lights, not only on wildlife but also on the traditional culture of local people may be more

significant than we imagine. Therefore, it is always essential for those who conduct research using fieldwork methods to record the changes that hunting activities using modern hunting technology has brought to the region in writing rather than just describing the number of animals caught.

References

- Fa, J. E., S. M. Funk and R. Nasi. 2022. *Hunting Wildlife in the Tropics and Subtropics*. UK: Cambridge University Press.
- Hongo, S., Z. C. B. Dzeffack, L. N. Vernyuy, S. Minami, Y. Nakashima, C. Djiéto-Lordon and H. Yasuoka. 2020. Use of Multi-layer Camera Trapping to Inventory Mammals in Rainforests in Southeast Cameroon, *African Study Monographs*, Supplementary Issue 60: 21–37.
- Ichikawa, M., S. Hattori and H. Yasuoka. 2017. Bushmeat Crisis, Forestry Reforms and Contemporary Hunting Among Central African Forest Hunters. In V. Reyes-García and A. Pyhälä eds., *Hunter-gatherers in a Changing World*. Switzerland: Springer International Publishing, pp. 59–75.
- Lee, T. M., A. Sigouin, M. Pinedo-Vasquez and R. Nasi. 2020. The Harvest of Tropical Wildlife for Bushmeat and Traditional Medicine, *Annual Review of Environment and Resources* 45(1): 145–170.

「最後の楽園」で森と関わる人々

増田初希*

世界からみたマダガスカル

「生物多様性ホットスポット」とは地球上にある非常に限られた面積のことを指し、他の地域ではみることのできない貴重な生物資源を含む場所の総称で、同時に人間活動により深刻な破壊が懸念されている場所でもある。生物多様性ホットスポットはマダガスカルを表象する時によく使われる言葉であり、同国特有の自然の価値を表している。マダガスカルは長い進化の過程でほとんどの生物分類において種レベルの固有率は90%を超えている [Goodman and Patterson 1997]。「地球最後の楽園」としてテレビ番組などで謳われているのを耳にした人は多いだろう。同国は深刻な貧困国でもあり、価値ある自然を保護するため1980年代から世界銀行など大規模なファンドがマダガスカルの自然を守るプロジェクトを継続的に実施している [Hannah *et al.* 1998]。

洗礼を受ける

筆者は幼少から動物に関心があり、いつかはアフリカで野生の動物を目にしたいと考えながら育った。マダガスカルへの渡航を決めたのも、エキゾチックな自然のイメージと固有種であるキツネザルに魅了されたからであ

る。憧れだった土地に初めて足を踏み入れた筆者はマダガスカルの洗礼をしっかりと受け、森林と人との膨大な関係の前に圧倒され戸惑いながら調査を進めていくこととなる。はじめにマダガスカルに降り立ったその日、空港で早速現金を盗まれることとなり、手配していた車も手違いのため来ず、なんとかホテルに着いた筆者は震えながら一夜を過ごした。犯罪率の高さは貧困と失業者の多さとも関係しているようで、首都を歩くと老若男女の物乞いや押し売りにもあった。これまで訪れた国とは全く異なるマダガスカルの様子を筆者は身をもって痛感した。

押し付けられたイメージ

2022年の9月30日に渡航し、約3ヶ月の滞在で感じたものは「エキゾチックで自然豊かなマダガスカル」というイメージはいわゆる西洋によるオリエンタリズムのような、外国のまなざしによって作られた表象であるということである。というのはマダガスカルの森林は1953年から2014年の間に44%が消失し、2005年以降も年間1.1%の森林が消失し続けている逼迫した状況にある [Vieilledent *et al.* 2018]。先行研究で知識として理解はしていても、実際にこの目で車窓から赤茶色

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

の地面や黄土色に濁りきった河川を眺めるまではその深刻さを身に染みて認識することはなかった。

マダガスカルに現存する森林のほとんどは保護区として囲われており、住民が容易に手の届くものではなくなっているのが現状である。森林の保護区化を促進したのは国際ファンドによるプロジェクトで、保護区化された森林は主に国外からの観光客を誘致するエコツーリズムの場となっている。我々が日本で見聞きしていたマダガスカルのイメージは海外によって作り出されたごく一部に過ぎないことを筆者は感じた。

アンダシベ村を訪れて

マダガスカルの人々と森林の関わりは完全に絶たれてしまったのかというところも言えない。筆者の調査地はマダガスカル東部に位置するアンダシベ村で、1970年に設立された国立公園と、住民によって管理されているコミュニティフォレストが存在している。この村ではフランス植民地化の鉄道建設のために木材の伐採と加工、採掘を基盤として発展してきた。現在ではエコツアーを産業の軸に構える動きがみられる。エコツアーのガイドとして働くガイドやコミュニティフォレストを運営する住民はアンダシベの森と関わることで生計を立てている。エコツアーガイドの主な仕事は観光客を見つけ、森の中を案内し動植物や森の風景を見せることだ。筆者がアンダシベでエコツアーに参加した時には同国で最大のキツネザルであるインドリ (*Indri indri*) や鮮やかな緑の体色が特徴的な

パーソンカメレオン (*Calumma parsonii*) を間近に観察することができた。実際に森の中を歩いて動植物を探すところも探検をしているような気分になれる。アンダシベで実施されている一般的なエコツアーの主なターゲットはインドリであり、あるガイドは「(アンダシベに来て) インドリを見ていないのはア



写真1 村に残される木材加工工場の跡、かつては村の主要産業でもあった



写真2 アンダシベの森で見かけた9kgもある最大のキツネザル・インドリ (左) とパーソンカメレオン (右)

ンダシベに来ていないことと一緒だ」と話した。

筆者はガイドに対して聞き取り調査を行うことで彼らのもつ価値観を理解しようと考えた。聞き取り調査は順風満帆とはゆかず、ガイドたちは筆者のことをマダガスカル語で外国人やよそ者を意味する「バザー」と呼び、なかなか心の内を話してもらえなかった。徐々にマダガスカル語を話すようになると相手の心のガードが溶けてゆくような感覚があった。また、面白いジョークも非常にウケが良かったがどちらもあまり精通していない筆者は苦戦を強いられた。そんな理由もあり、ガイドの溜まり場に顔を出したり、親切的なガイドの後をついてツアーに参加するところから調査を始めた。アンダシベ村のガイドは全員がフリーランスで、フランス語や英語を使い分けながら顧客を獲得している。周辺には管轄が異なるエコツーリズム用の森が複数あり、ガイドはその中から客待ちをする森を選ぶことができる。中でも客数の多い国立公園が人気で、朝からガイドの待機列に並んで客待ちをする。語学が堪能であったり、動物を見つけることが得意であるガイドは優遇され、ツアー会社から直々に仕事をもらうガイドもいる。エコツアーによる収入はガイドの能力により差があるようだ。

あるガイドは自身がエコツアーガイドを志したきっかけとして「ガイドは自分が得られる中で最良の選択肢だった。これ以外に仕事がない」と答えた。必ずしも多くのガイドが自然の価値を認識してガイド職を志したというわけではない。しかし多くの人がガイドと

して働くことで時には多くの収入を見込み、生計を立てることができる職であると認識しているようである。ある日に筆者が女性ガイドBの自宅を訪問し、食卓を囲んでいると彼女は自身の身の上を話し始めた。「(私の)旦那は数年間家を離れたことがあった。だけど私にはガイドの仕事でお金を得ることができたから娘2人を食べさせて、学校に通わせることもできた。…(今では)旦那は帰ってきたが、私はこの仕事をするのでいつでも自立することができるのだ。」

ガイドを職として生計を立てる人の中には「森(や動物)がいないと仕事として成り立たない」とし、自分たちの生計の場を守るため森の保護に価値を見出す人も多い。コミュニティフォレストを運営するガイドの中には実際に森林を守るためのプロジェクト活動を行なうものもいる。

アンダシベ地域の森の脅威のひとつとして、住民による焼畑が挙げられる [Dolch et al. 2015]。農民は焼畑を行なうほかに生業がなく、非持続的な焼畑を実践している。現



写真3 現地で世話になったガイド家族と食卓を囲む



写真 4 焼畑の行なわれた山

地では乾季から雨季に切り替わる 12 月は焼畑のシーズンとされ、至る所から煙とともに焼けた匂いが漂ってきた。時にこの焼畑の火は保護林まで延焼することもあると現地のガイドは言う。コミュニティフォレストではこのような焼畑を実践する周辺の農村に向けて、焼畑を行なわなくても食物が生産できるようにマメなどの代替作物や、農業技術の提供を行なっている。プロジェクトを資金面で支えるのは外国のファンドだ。ここでは多様なファンドを誘致して破壊的な森の利用を食い止めようとする動きが垣間みえた。

マダガスカルでは海外の介入のもと自然保護が実施され、現地の人々と森林との間には隔たりがあるかのように思えた。しかし、アンダシベでのガイドの活動を見ていると導入された自然保護制度やエコツーリズムを利用することで現地の人々が徐々に、生活基盤のための森として自然の価値を見出している様子がうかがえた。海外から押し付けのように導入された「自然保護」という概念を現地の人々はエコツーリズムとの関わりの中で彼らな

りの価値を見出そうとしているのだろうと筆者は感じた。一方で森林そのものが人間活動によってすぐに消えてしまうといった脆弱な面も目の当たりにし、自然保護と現地の人々の生計との間で不安定なバランスを保ちながら活動がなされている様子をアンバランスに感じた。村人から国際団体まで幅広いステークホルダーの思いが交差するこの村で、ここに住まう人々がどの方向に向かっていくのか見届けたいと思うのである。

引用文献

- Dolch, R., J. Ndriamiary, T. Ratolojanahary, M. Randrianasolo and I. A. Ramanantenasoa. 2015. Improving Livelihoods, Training Paracologists, Enthraling Children: Earning Trust for Effective Community-based Biodiversity Conservation in Andasibe, Eastern Madagascar, *Madagascar Conservation and Development* 10(1): 21–28.
- Goodman, S. M. and B. D. Patterson. 1997. *Natural Change and Human Impact in Madagascar*. Washington, DC: Smithsonian Institution Press.
- Hannah, L., B. Rakotosamimanana, J. Ganzhorn, R. A. Mittermeier, S. Olivieri, L. Iyer, S. Rajaobelina, J. Hough, F. Andriamialisoa, I. Bowles and G. Tilkin. 1998. Participatory Planning, Scientific Priorities, and Landscape Conservation in Madagascar, *Environmental Conservation* 25(1): 30–36.
- Vieilledent, G., C. Grinand, F. A. Rakotomalala, R. Ranaivosoa, J.-R. Rakotoarijaona, T. F. Allnutt and F. Achard. 2018. Combining Global Tree Cover Loss Data with Historical National Forest Cover Maps to Look at Six Decades of Deforestation and Forest Fragmentation in Madagascar, *Biological Conservation* 222: 189–197.

シマとマラウイ

吉村龍典*

「週7日シマにするから」これからマラウイ共和国で一緒に過ごす留学生から言われた言葉だ。私は2022年11月から3ヵ月間、同じ大学に留学中のマラウイ人学生2人と共同生活をしながらフィールドワークをする機会を得た。初めてのアフリカ生活、その初日のことだった。ルームメイトになる彼らは、顔を合わせた時に「これからの食事は一緒にする？それとも別々にする？」と優しくも聞いてくれた。せっかくの機会なので、一緒にすると答えると冒頭の言葉が返ってきた。食べたことのないようなものを毎日食べるのはさすがにキツイ。日本に生まれ育った身としては米が恋しくなってくると思ったので、なんとか交渉して週2日は米にしてみました。

シマとは

シマ (*nshima*) とはメイズ (*maize*, トウモロコシ) の粉をお湯にといて、加熱しながらペースト状に練り上げた練り粥である (写真1)。スワヒリ語ではウガリと呼ばれ、主に南東アフリカの地域で広く食されている [志和地 2009]。

シマと一緒に食べるのは牛肉、鶏肉、山羊肉、魚、トマトのスープ、豆の煮物、青菜の

炒め物などだ。マラウイの人にとっては、食事におけるシマの位置づけにもこだわりがある。ルームメイトに「副菜は何にする？」と聞かれた時、サラダかフルーツと答えると「え？副菜といえば肉か魚だよ」と言われる。それって主菜じゃないの？と言うと「主菜はシマだ」と返ってくる。その答えから、マラウイの人にとってのシマという食べ物の重要度がうかがえた。

シマはマラウイ料理のレストランには必ずといっていいほどあるメニューで、米やフライドポテトが無くてはシマがないローカルレストランはあまりない。マラウイの農家の家庭に招かれて昼食などに行くと、ほぼシマ



写真1 訪問した家庭でいただいた昼食
保温器具に入れられたシマと肉から取り分けて食べる。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

が出てくる。そこでは例外なくお代わりがしたくなるほど美味しかった。不思議なもので、しばらくすると、米が2日続く日にはシマが恋しくなっていた。

シマの調理法と食べ方

シマの調理法は簡単なようで難しく、手間がかかる。沸騰した鍋にメイズ粉を加え、加熱しながら細長い木べらでかき混ぜる。適度な粘度になるまで粉を追加しながら調整するが、粉の入れ方や量の違いで、ダマになったり、弾力が出なかったりする。粉や水の量は目分量で、固さは調理する人の感覚次第だ。その後はウォーマーと呼ばれる保温器に入れ、各自が自由に取りれるようにする。食べ方にも流儀があり、必ず手で食べる。スプーンやフォークなどは使わない。手の親指、人差し指、中指を使って、一口で食べられるサイズにちぎり、手のひらの上で数回、転がしたり、軽く握ったりして団子状にしてから、口に入れる。皿に残った肉や魚の汁を染み込ませて食べることも多い。

私はルームメイトに毎日のように、手取り足取り調理法を教わり、なんとかシマを作れるようになった。ようやく普通に食べてもらえるぐらいにはなったものの、いまだに合格点は出ていない。保水具合や柔らかさ、粘度や食感などいくつかのポイントがあり、それら全てを揃えるのはなかなか難しい。最初にシマを作った時は彼らに「これはちょっと食べられない」と言われた。捨てるのも忍びなく、飼い犬に与えたところ、おいしそうに食べていたことは印象に残っている。

メイズの栽培時期

シマの原材料はメイズで、その粒を精米機のようなミル機ですり潰して粉にし、メイズ粉として市場で売られる。メイズが栽培されるのは通常、マラウイの雨季の始まりである12月から雨季が終わる翌年5～6月くらいまでである(写真2)。しかし、場所や種類によってはこの限りではなく、雨が溜まりやすい場所では9月くらいから播種を始めるようだ。実際、私が住んでいた近くの山間部では12月頃にはメイズの実が成っていて、野生のサルがそれを目当てに人間の目を盗んで食べに来ていた。また、通常種ではメイズの実が成熟するまでに半年かかるが、3ヵ月で成熟する促成種もある。この促成種の実は柔らかいのでメイズ粉ではなくて焼きトウモロコシのように火で炙って食べる人が多いようだ。私も雨季が始まる前に路上で売っているものを食べたことがある。野外で炭火を使って調理をしたそのメイズは、日本の夜店のトウモロコシのように香ばしく、一粒ごとの味が濃く、噛み応えがあったのを覚えている。



写真2 雨季のメイズ畑

シマと共に

マラウイの直射日光は暑くてキツイ。帽子とサングラスと長袖を着て防御していても、1時間も日なたにいとクラツとしてくる。そんな中でもルームメイトの友人である農家の人たちは重い堆肥を涼しげな顔で運んできて、何事もなかったかのように颯爽と動いている。彼らはよく働き、たまにはゲキも飛ばす。一緒に畑を耕していると、「キミ、腰が入っていない」「そんなのだったらマラウイで生きていけないよ」と言われ、体育会系の部活の先輩のようだった。日中にその日の農作業が終わらず、日没後に暗闇の中で種撒きをした時もあった。そうして汗をかいて体を動かした後は、猛烈にお腹が空いてくる。家に帰るとシマが待っていて、マラウイ生活も1ヵ月を過ぎる頃にはそれが毎日の楽しみになっていた。豪雨の日、肌寒い日、何もない日にも、いつもシマの主張しすぎない味と食べ飽きない奥深さが疲れた体に安心感を与えてくれた。

シマの製造器に関する疑問

ひとつ不思議に思うことがある。それはどうしてシマの自動製造器が作られないかだ。日本の主食である米は炊飯器のボタンを押すだけなのに対し、シマを作るにはそれなりの時間と手間がかかる。炊飯器のようにボタンひとつ押せば、自動で出来上がる調理器具が開発されると便利だと思う。アフリカで広く食べられているウガリやシマなら、採算が合いそうだが、実際には作られていない。その答えのひとつとして考えられるのは火加減と

スローライフの大切さだ。ふっくらとおいしいシマを作るためには、じっくりとした炭火で30分以上かけることが必要で、「この味は炭火でしか出せない」という。その時間が惜しくないのかとルームメイトに聞くと、「この（シマを作る）時間は雑事を忘れる必要な時間だ」と言う。日々の家事のための時間を少しでも節約できる商品があれば飛びついてしまう自分だが、時間をかける調理の時間も本来、人が生きるのに必要な時間かもしれない。そんなことをアフリカで考えさせられた。

私の研究とメイズ

私の研究の目的は、し尿の肥料価値を高める伝達方法の検討である。エコロジカルサニテーショントイレ（以下エコサントイレ；写真3）は別々に回収される尿と大便を農業利用するが、し尿の農業利用に心理的抵抗感を感じる人は少なくない。し尿の農業利用のためには、し尿由来の肥料の価値を農家にいかに伝えるかが重要な要素のひとつだと考えている。そのため、現在は現地での圃場でし尿の肥料価値を実証するための圃場実験を行なっている。試験作物には現地の人にとって馴染みのあるシマの原材料であるメイズを選んだ。マラウイの人にとって一番身近で生活と結びついている作物だからである。世界情勢の影響で高騰している化学肥料を補填できれば、費用の節約と収量の増加で生計の向上にも役立つことができる。



写真 3 村の畑にあるエコサントイレ



写真 4 村の家庭の調理場

生活の変化とエコサントイレ

最近ではマラウイでも近代化が進み、家庭の調理方法が焚火調理から電気コンロ加熱になったり、井戸が水道になったり、藁ぶき屋根がトタン屋根になってきているようだ。エコサントイレでは排便後に便の無害化のため

に灰をかけるが、その灰は家庭の台所で燃料として使う木の枝や炭などに由来する（写真 4）。しかし、電気コンロの普及により、炭や薪を使わなくなった家庭も増えてきている。頻繁に起こる停電時には電気コンロが使えないため、炭の需要は残るものの、これらの変化がエコサントイレの普及を阻む原因のひとつとなっている。

引用文献

志和地弘信. 2009. 「アフリカの食文化と農業」
『ARDEC』 40: 8-12.

インド・ハンセン病コロニーにおいて踊ること

八木 咲 良*

一体何時間踊り続けたのだろう。炎天下に色とりどりの粉を纏いながら、人々が踏み鳴

らした地面からは色の混じった土埃が舞っている。踊り狂うとは正にこのことだ。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 ホーリーで使う色粉

2023年3月7日はホーリー祭だった。ホーリーはインド三大祭のひとつといわれる。人々が盛大に祝う春の祭だ。豊穡を祈るために鮮やかな色の粉を顔に付け合ったり、投げ合ったりする。熱気がピークに達するのは、若い男性らが組体操のように身体を使って縦三段にもなる円陣を作り、土製のハリ（インドの鍋）を割る瞬間だ。ハリの中にはお菓子と色粉が入っていて、割れた瞬間に子どもたちが飛びつく。

私のフィールドはインド西ベンガル州にあるマニプールというハンセン病コロニーだ。多くのハンセン病コロニーは19世紀以降にハンセン病に罹患したことで家や故郷を追い出された、体に奇形をもつ浮浪の罹患者が作った村である。しかし今では彼らの孫やひ孫といった、ハンセン病に罹患したことのない世代が多く暮らしている。またたとえ罹患しても、1947年にMDT（Multi Drug Therapy）が開発されたことで、彼らは奇形といった後遺症なく完治している。

マニプール・コロニーも1929年に6人のハンセン病罹患者によって作られたハンセン



写真2 Palash Flowerの飾りとメヘンディ（ヘナタトゥー）

病コロニーだ。彼らはキリスト教系の療養所などの医療機関から退院した後、家族に家に戻ることを拒否されたため自らコロニーを作った。感染症だからというだけではなく、ハンセン病になる原因が殺人や窃盗といった前世での悪行であると考えられていることも罹患者を家から追い出す理由になっている。このような偏見は今も残っており、ハンセン病に罹患していなくてもコロニーに住んでいるだけで差別をされることが多々ある。それでも今やマニプールには村を自治する独自のNPOがあり、1,200人もの人々が暮らしている。

そんなマニプールではホーリーの日には特別なプログラムを用意していて、色粉を投げ合うだけではなく女性たちやクリシュナ神・ラクシュミー女神に扮した子どもたちのダンスが披露される。若い女性はお揃いで赤と黄色のサリーを着て、オレンジのPalash Flower（ハナモツヤクノキ）で作った首輪や腕輪で着飾る。村長曰く Palash Flower はこの時期



写真3 街から離れ線路沿いにあるコロニー

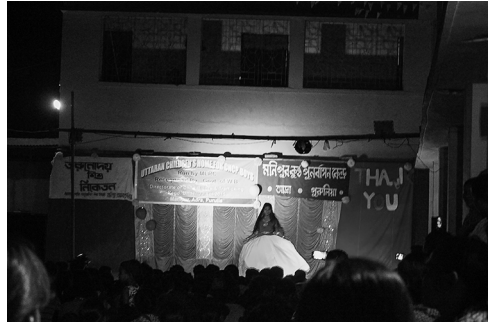


写真4 大勢の前でダンスを披露する少女

に綺麗な花をたくさん咲かせることから、春の到来や生命の循環を意味するようだ。結局今回のホーリーでは4-5時間ほど踊りが続いた。なぜここまで踊ることが好きなのだろうか。

インドといえばカレーはもちろん、映画や音楽を思い浮かべる人も多いのではないだろうか。例に漏れず、マニプールも結婚式、プージャー（宗教儀礼）、パーティー、映画鑑賞などでダンスの時間やステージが設けられ、みんなが踊り狂う。ただステージで踊りを見せることと、みんなで踊り狂うことは異なる。大体ダンスのクオリティーはそこまで気にされることはない。しかしステージの上で踊るときは、ダンスをみんなに披露するため猛練習をする。貧困基準以下の暮らしをするコロニーの中には、踊りの教室に通える子どもはほとんどいない。教育上の理由で「勉強をしなくてもよい日」とされる日曜日に4時間だけ許されたテレビ鑑賞で覚えたものをまねたり、村人から借りた携帯を見たりして、ダンスの練習をする。毎日学校帰りのグラウンドで1時間、寝る前の1時間を使う。

そのように子どもたちが頑張るのはダンスを踊る機会を増やすためだ。実際多くの子どもが1曲しか踊らないのに対して、ダンスの上手な子どもは2、3曲踊ることもある。

一方でみんなで踊り狂うときは誰もそのダンスが上手いかどうかは気にしない。踊りたい人が踊りたいだけ踊る。ダンスの種類はさまざまで、日本でいう「かごめかごめ」のように手を繋いで円を作ることもあれば、ナイトクラブにいるようにただ体を好きに揺らして想いのままに踊ることもある。そこにルールはない。もちろんインドらしい踊りはある。インドの踊りは足技が入っていたり、手の動きがしなやかであったりと、日本でよく目にするダンスとは異なる。私はインド的ダンスを知らないで、子どもたちの練習についていくことによって、やっと少しずつニュアンスを覚えた。そんなたどたどしい私のダンスでも村人たちは喜んで自分たちの輪に迎え入れてくれる。

1898年にLepers Act（らい病患者法）というハンセン病患者を隔離し治療するための法律が施行された。それは放浪して物乞いし

ているハンセン病患者を隔離し、感染が広がるのを防ぐための法律だった。日本ほどの強制隔離はないが、ハンセン病患者は公共交通機関の使用禁止や離婚の正当化などの理由から隔離施設に入らざるを得ない状況になった。2005年にインド政府がハンセン病撲滅宣言（WHOが示した新規患者数が10,000人のうち1人以下になること）を出したこともあり、Lepers Actは2016年に撤廃されたがハンセン病が遺伝病・業病だという偏見は残ったままだった。実際ハンセン病コロニーはインド全土に700以上あり、差別由来の貧困や就労問題に悩まされている。今でもハンセン病患者やその親族はインド社会に迎えられていないのだ。

そんな背景がある中でハンセン病コロニー居住者が外部の人間を信頼するのは難しい。もちろん海外からの支援やチャリティは多くあるため、チャリティ目的の場合は表面的に仲良くすることはできる。しかしチャリティは一度限りのものが多く、ハンセン病コロニー居住者の生活はほとんど変わらない。よってチャリティそのものによって自分たちの生活向上を期待することは出来ない。私自身が初めてマニプールを訪問したのは2017年で、学生ボランティアとしてだった。重いものを持つ回復者を助けようとしたり、井戸で水を汲む手伝いをしようとするとなんか

け寄ってきて「あなたはやらなくていい」と言われた。彼らにとって私は一時的なゲストであり、日常生活の手伝いはやらせることではないと判断されていたようだ。何度も通い同じ空間を共にすることでやっと信頼を得たのかもしれない。しかし一番変化を感じたのは初めて一緒に踊ったときだった。大人しいイメージのある日本人が踊ることが珍しかったのか（ただ単に私の拙いダンスが面白かったのもあるだろう）、村人たちはとても喜びいろんなことを教えてくれた。それから道でも声をかけられるようになり、ハンセン病のことや家庭のことを話してくれるようになった。

私だけでなく、普段マニプールを全く訪れることのない周囲の村人もパーティーやホーリー祭には参加する。もちろん全く偏見がないわけではない。過去に実施した調査では、ハンセン病やマニプール・コロニーに対して恐れを抱いたり、結婚ができないと答える人もいた。しかし少なくとも若い世代はマニプールで純粋にダンスを楽しんでいる。

ハンセン病コロニーだからこそ外部者を「迎え入れる」ことに他では必要ないようなきっかけが必要だ。マニプール・コロニーにとってダンスは、迎え入れることでもあり、同時に社会に迎え入れられることでもあるのだろう。